ぬきとられてゆく日、
この天命の鎖をほどいて
どこかへ
よろこびをさがしたい。
よわいものの
よろめき……
われらは、
この微風の音にさへ
もはやおどろいて
神経の律が小縒合ふぐらる、

おお
よわいものの
よろめき……
地肌にあがる息をすうて、
肥料のにほひにからだをたもち
葉のしぼみをなほす、
そのすきでさへ
おどろくよ！
人にぬきとられる日、
くれゆく秋がおそろしい。

栗鼠

すっぱいやうな顔をしてゐる。
あんな高い樹のまたのところで、
ちょんと
すましこんでゐる。
木實が熟した、秋がきた。
あら
お辭儀をするやうに

まへあしをのべて、
さらさらながれる
水音にききとれてるやうに、
あんなぷっくらした尾を
輕妙にふりかへながらだまりこむ。
あの目つきは皮肉だなあ……。

蔦

うすぐもれる空をあふぎて
つと、たかく石碑はたつ。
文字をきざまれんとこの石碑は建てられたり。
人工はおこたる、
つひに年はかさなりてすぐ。

びびたる生活はここに始まる。

閑寂に時ふけるあけぼのも。
のびんとするつとめおこたらず、
人の希望にさきんじて
この石碑に蔦はからまれり。
あま蛙のあしゆびの如き
吸盤のはえしせんたんにふれて、
ひびおこたらずのびゆく。

朦朧にわびし月かげの夜も、
ねむりむさぼらず

ひそかに匍ひゆく蔓のひかり、
いづこともなく
たゆる性のままにからまりて。

繭

こごえてゐる音樂のやうだ。
あの繭が
なまぎんいろにかがやいてゐる。
曲線美の居眠のやうに
そこに蠶の生きる日の技工が映る……
のっぺりした死眠のやうなぐらでーしょん……
たふとい客觀にほろびない
うるはしい息づき……

赤い幻覺

ぎやまん

のごとき夢のかたまりは
うすら青うとけて
いまみゆる物象の影へ
亡靈の根、生えまつはる。

蛇の脫殼（ぬけがら）

のごとき謙虛のこころへ

灰白い誰我のとどまり、
やがてくされて
そこに蟲がむらがる
うようよ……。

すゐーとびー

いくらながめても
そこらにかをりがみつからない。
晝日にもぐりてうつら眠り
讀書の眼がさめおきて
まともへ回顧の夕日がかぎる。

ヴィオロン……

よ、ひびくよひびく
をろをろとひびく朽葉に秋のとどこほり、
瞑想は無登であつた
あの雲をおひかけてゆくように、
——遂にとげられなかつた
戀のほろびの日のあきらめ……。

詩人

よ、かへれかへれ
朽木のごとくしつぼくのかんがへに。

繊美によれた絹糸の空想、
深紅色の振動が胸底で泣いじやくる
そばで、
ただれる眞理をつくろひなほす
暇の襞襟に未だ未だのこるよ
赤い幻覺……。

（琴）

大正八年六月二十日印刷
大正八年六月廿五日發行
【びーどろ】　定價金壹圓

著者　三石元茂
發行者　東市市日本橋區檜物町九番地　西村寅次郎
印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　栗原輝吉
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　博文館印刷所
發行所　東京市日本橋區檜物町九番地　東雲堂書店
電話本局一八七一番
振替東京五六一四番

181
1871

終